

上野俊樹教授略歴・主要著作目録

略 歴

- 1942年9月30日 大阪市西成区で生まれる
 1968年3月 早稲田大学第一政経学部卒業
 1968年4月 大阪市立大学大学院経済学研究科修士課程入学
 1970年3月 同上修了
 1970年4月 大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程入学
 1973年3月 同上博士課程単位取得満期退学
 1973年4月 立命館大学経済学部助教授
 1983年4月 立命館大学経済学部教授
 1992年10月 博士（経済学）（立命館大学）
 1999年5月5日 病没
 1999年5月5日 立命館大学名誉教授

学 内 役 職

- 1981年4月～1982年3月 立命館大学経済学部学生主事
 1988年4月～1989年3月 立命館大学経済学部主事
 1988年4月～1989年3月 立命館大学経済学研究科主事
 1989年4月～1990年3月 立命館大学経済学部調査委員長
 1992年4月～1993年3月 立命館大学学生部副部長
 1993年4月～1995年3月 立命館大学学生部長

学 会

経済学史学会，経済理論学会，信用理論学会に所属

著 書

- 1982年 単著『経済学とイデオロギー』（有斐閣，1982年6月）
 1985年 編著『大学生講座』全3巻（大月書店，1985年5月，6月，7月）
 1987年 編著『現代の国家独占資本主義』上，下（大月書店，1987年5月，6月）
 1991年 単著『アルチュセールとプーランツァス』（新日本出版社，1991年5月）
 1993年 編著『現代資本主義をみる目』（文理閣，1993年6月）
 1978年 共著「現実性」（第6章）（鯉坂・有尾・鈴木編『ヘーゲル論理学入門』有斐閣，1978年3月）
 1984年 共著「河上肇と『資本論』（塩田編『河上肇〈自叙伝〉の世界』1984年11月）

- 共著「〈ネアカ〉と〈ネクラ〉が象徴する文化的意味」（『ニューアカデミズム』新日本出版社、1985年6月）
- 1989年 共著「プーランツァスの国家論」（『ネオ・マルクス主義——研究と批判』新日本出版社、1989年7月）

論 文

- 1971年 「科学とイデオロギー」（『大阪市大論集』第12号1971年10月）
- 1972年 「経済学史研究の動向とあり方」（『季刊 科学と思想』第4号1972年4月）
「内田義彦氏の経済学史研究の方法と経済学的意味についての一考察」（『経済学雑誌』第67巻第2号1972年8月）
- 1973年 「スミス分業論の基本的性格」（『大阪市大論集』第15号1973年1月）
「平田清明氏の価値論」（『立命館経済学』第22巻第3・4号1973年10月）
- 1975年 「見田石介先生の科学と現実に対する態度に学ぶ」（『科学と人間』第3号1975年11月）
- 1976年 「竹内芳郎氏の佐竹恒有（見田石介）氏批判への反批判」（『科学と人間』第4号1976年11月）
『見田石介著作集』第3巻解題 島津秀典氏と共同執筆（大月書店、1976年12月）
- 1977年 『見田石介著作集』補巻解題 鈴木茂氏と共同執筆（大月書店、1977年4月）
- 1978年 「経済学史の意義と方法（一）」（『立命館経済学』第27巻第1号1978年3月）
「古典研究・エンゲルス『反デューリング論』2・経済学」角田修一氏と共同執筆（『経済』1978年9月）
- 1979年 「経済学史の学び方」（『経済』1979年5月）
- 1980年 「学生の将来的展望——就職と学習・活動・大学生活」（『立命評論』第68号1980年7月）
- 1981年 「社会的共同業務と国家」上（『立命館経済学』第29巻第6号1981年3月）
「経済学史の意義と方法（二）」（『立命館経済学』第30巻第1号1981年4月）
「社会的共同業務と国家」上之二（『立命館経済学』第30巻第2号1981年6月）
「デイヴィド・リカードウ」上（『経済』1981年6月）
「デイヴィド・リカードウ」中（『経済』1981年7月）
「デイヴィド・リカードウ」下の一（『経済』1981年8月）
「デイヴィド・リカードウ」完（『経済』1981年9月）
「経済学史の意義と方法（三）」（『立命館経済学』第30巻第3・4・5号1981年12月）
- 1982年 「経済学史の意義と方法（完）」（『立命館経済学』第30巻第6号1982年2月）
「T. R. マルサス」上（『経済』1982年7月）
「T. R. マルサス」中（『経済』1982年8月）
「T. R. マルサス」下（『経済』1982年9月）
「大内力氏の『経済学体系』批判」上（『経済』1982年11月）
- 1983年 「大内力氏の『経済学体系』批判」下（『経済』1983年1月）
「イデオロギーと人格形成の危機」（『文化評論』1983年2月）

- 1984年 「〈ネアカ〉と〈ネクラ〉が象徴する文化的意味」（『青年運動』1984年7月）
 「『家族、私有財産および国家の起源』の現代的意義——『国家二重機能論』との関係において」（『経済』1984年10月）
- 1985年 「労働価値論と現代」1（『経済』1985年5月）
 「労働価値論と現代」2（『経済』1985年6月）
 「労働価値論と現代」3（『経済』1985年7月）
 「労働価値論と現代」完（『経済』1985年8月）
 「消費欲求の形成と文化水準」（『生活ジャーナル』第67号1985年11月）
- 1986年 「天皇在位60周年キャンペーンと中曽根『新国家主義』」上（『季刊 労働者教育』58号1986年9月）
- 1987年 「天皇在位60周年キャンペーンと中曽根『新国家主義』」下（『季刊 労働者教育』59号1987年1月）
 「臨教審と大学審議会法案」（『日本の科学者』第22巻第9号1987年9月）
 「プーランツァスの国家論」（『前衛』1987年12月）
- 1988年 「プーランツァスの階級論」（『前衛』1988年2月）
 「プーランツァスの権力論」（『前衛』1988年4月）
 「今日の日米関係と日本資本主義」（『経済』1988年5月）
 「職場の現実をリアルにみる視点」（『経済』1988年5月）
- 1989年 「アルチュセールの認識論とイデオロギー論(1)」（『科学と思想』第73号1989年7月）
 「社公民の『共同政策』か真の革新的経済政策か」（『経済』1989年7月）
 「ネオ・マルクス主義の特徴と影響」（『中小商工業研究』第21号1989年12月）
 「『全般的危機論』と資本の矛盾の激化」（『経済』1989年12月）
- 1990年 「アルチュセールの認識論とイデオロギー論(2)」（『科学と思想』第75号1990年1月）
 「立命館大学の外国人留学生の現状と課題」阿曾沼一成氏と共同執筆（『日本の科学者』第25巻第3号1990年3月）
 「アルチュセールの認識論とイデオロギー論(3)」（『科学と思想』第76号1990年4月）
 「アルチュセールの認識論とイデオロギー論(4)」（『科学と思想』第77号1990年7月）
 「公的規制問題と日米構造協議」（『日本の科学者』第25巻第10号1990年10月）
 「競争と独占」（『唯物論と現代』No.6 1990年11月）
- 1991年 「激動一年目のポーランドをゆく」（『文化評論』1991年2月）
- 1992年 「見田石介先生における科学的精神とイデオロギー」（『唯物論と現代』No.17 1996年8月）
- 1999年 「民属（Volk）と（民族）Nationの区別にもとづく民族理論の形成」（『立命館経済学』第47巻第2・3・4号1998年10月）

翻 訳

- 1982年 翻訳「資本の流通過程」角田修一氏との共訳（『資本論』第2部第1編）（『マルクスライブラリー』第3巻大月書店、1982年3月）

1983年 翻訳「単純再生産」（『資本論』第1部第7編第21章，新日本出版社，1983年）

書 評

1976年 「『資本論』研究に大きな刺激——林直道『フランス語版資本論の研究』」（『経済』1976年12月）

1981年 「平野喜一郎著『社会科学の誕生——科学とヒューマニズム』（大月書店）」（立命館大学生協書評誌『蒼穹（あおぞら）』第12号1981年5月25日）

1985年 「重田澄男『資本論の発見——市民社会と初期マルクス』」（『経済』1983年5月）

辞 典

1976年 「経済学批判の意味」「経済学の階級性と科学性」「イデオロギー」「経済学の理論の真理性とその検証」（『マルクス経済学の基礎知識』有斐閣，1976年11月）

1979年 「イデオロギー」「土台と上部構造」「V+Mのドグマ」「スミスの労働価値説」「収穫逓減の法則」（『経済学辞典』大月書店，1979年4月）

論 壇 時 評

1984年 「ハイテク・フィーバーと資本主義文化」（『文化評論』1984年12月）

1985年 「現実性増す“スターウォーズ”への警告」（『文化評論』1985年1月）

「核抑止肯定のニヒリズム的世界観」（『文化評論』1985年2月）

対談・座談会

1979年 「座談会 ヘーゲル論理学から何を学ぶか——『ヘーゲル大論理学研究』の刊行によせて」（大月書店，1979年10月）

1981年 「座談会 マルクス経済学の研究動向と教育問題」（『経済科学通信』第30号1981年1月冬季号）

1982年 「座談会 日本経済分析と労働者発達の諸条件——『講座・現代経済学』全6巻完結を記念して——」（『経済科学通信』第35号1982年7月）

1986年 「『意識の問題』を正面にすえる（新春対談）」（『宣伝と組織』1986年1月）

1989年 「座談会 働くことの意味を問い直す」（『宣伝と組織』1989年2月）

「座談会 現代科学技術と若手研究者」（『日本の科学者』1989年5月）

1992年 「座談会：科学的社会主義の学説・理論と現代の課題——批判者への批判」（『科学と思想』第84号1992年4月）

報 告 要 旨

1982年 「『経済学とイデオロギー』によせて」（『立命館経済学』第31巻第4号1982年10月）

1985年 「労働価値論と現代」（『立命館経済学』第34巻第3号1985年8月）

寄稿

- 1982年 「夏休みにすすめる一冊の本」(立命館大学生協書評誌『蒼穹(あおぞら)』第17号1982年6月)
- 1985年 「真に主体的な文化形成を——財界の文化戦略」(『赤旗』1985年6月18日付)
「大学で君は何を学ぶか」(『青年運動』1985年4月)
- 1988年 「私と古典学習1」(『青年運動』1988年2月)
- 1989年 「『経済』と私」(『経済』1989年4月)
- 1990年 「すべての主張は根拠である(科学者の目)」(『日本の科学者』第25巻2号1990年2月)
「科学的精神の不在——『文芸春秋』2月号『マルクスは死んだのか』を読む」上・下(『赤旗』1990年2月23日, 24日付)
「経済を科学する」(『青年運動』1990年5月)
- 1995年 「『APEC』の何が問題なのか——『貿易と投資の自由化』は“悪魔のサイクル”を増幅——大企業の民主的規制こそ今」(『京都民報』1995年11月5日付)